

日本図の変遷

～赤水から伊能へ～

小野寺淳 平井松午

……7

一七七九(安永八)年完成、翌年春、大坂の書肆(江戸時代の出版業者)浅野弥兵衛刊「改正日本輿地路程全図」は経緯度線上に日本列島を正確に位置付けた初の刊行日本図であった。これを赤水図と呼びならわす。赤水は西洋天文学書を元にした游子六輯『天経或問』(中国清代初期の天文学・宇宙論の入門書)を手に入れ、地球が球体であることや緯度経度も理解していた。図解の書き込みを入れた同書が子孫宅に残されている。

平面に球体を表す図法の表現は難しく、京都御所を基点に経線を引いた

改正日本輿地路程全図



中国清代初期の天文学・宇宙論の入門書「天経或問」

安永版改正日本輿地路程全図 (高萩市歴史民俗資料館蔵、134×83.5字)

と記されている。江戸時代後期の川村寿庵(医師)や古川古松軒(地理学者)が指摘した下北半島の形状など、埋木により修正を繰り返して刊行された。流宣図と赤水図(アルス・メティカ)の著者海田俊一氏によれば、安永本は十三種類もあるという。赤水図のもう一つの特徴は、図名に路程があるように、主要な山川、城下町や宿場町などの地名が記載され、街道が朱線で示された点である。詳細な情報 は、江戸幕府撰日本図を参照しなれば表現できなかったであろう。

『大日本史』編纂を命じた徳川光圀は江戸の上屋敷内に、西山荘(現茨城県常陸太田市)に隠居すると水戸城二の丸にも、彰考館を設置。赤水は彰考館を利用できるようになると、おそらく所蔵の幕府撰日本図の写しに近似と指摘されている。子孫宅に残された史料や古図を見る限りでは、大坂の蔵書家、木村兼葎堂や古川古松軒などの知識人所有地図の写し、風土記、刊行国図なども参考にしたと思われる。

舟路を加え、図版を縮小し一七九一(寛政三)年に赤水図は再版された。こちらも修正が加えられ、海田氏によれば四種類が確認されるという。長久保赤水頭彰会顧問の馬場章氏によれば、赤水図は没後も改訂、海賊版が出回るなど需要が高かった。

日本図以外にも、赤水は一七八三(天明三)年「大清広輿図」、八五年には「地球万国山海輿地全図説」、一七八九(寛政元)年「唐土歴代州郡沿革地図」など、多くの地図を製作して世に問っている。

(おのでら・あつし 放送大茨城学習センター所長)